

econ. No. 45

特集 コロナ下の地域研修に取り組む

山田誠治先生・上園昌武先生・古林英一先生・藤田知也先生

news 1 地域研修報告会を開催

浅妻裕先生 (4 ページ)

news 2 基礎ゼミプレゼン大会を開催

野口剛先生 (6 ページ)

news 2 財政学講演会を開催

野口剛先生 (6 ページ)

連載 column From a Distance ⑪

水野邦彦先生 (6 ページ)

連載企画 研究室の窓から●一條由紀先生

(5 ページ)

表紙写真

2021 地域研修西村ゼミ、研修地下川町美桑が丘の森で

news 3 フロンティア講座を開催

神山義治先生・上村仁司先生 (8 ページ)

news 3 食糧支援プロジェクト

桑折大哉さん (8 ページ)

news 3 卒業研究中間発表会を開催

逸見宜義先生 (8 ページ)

news 3 就職情報

濱田武士先生 (8 ページ)



interview

OG 訪問

働きウーマン ⑳

杉村紗依子さん (7 ページ)

特集 コロナ下の地域研修に取り組む

「学びの場はキャンパスだけではない」を基本コンセプトとし、自治体、企業、地域住民など、地域社会を構成する様々な主体に直接アプローチし、そこから学ぶのが地域研修です。2020、2021年とコロナ下の状況で、多くの制約を強いられながらも工夫を重ね地域を訪問し、またインターネットという情報技術も駆使しながら、今年度もさまざまな地域研修がおこなわれました。その中から1部山田ゼミⅡ、1部古林ゼミⅡ、1・2部上園ゼミ、1部藤田ゼミⅠの取り組みを紹介します。

<2021地域研修実施ゼミ>

浅妻1部ゼミⅠ・Ⅱ	北見市・網走市
浅妻2部ゼミⅠ・Ⅱ	厚真町
上園1・2部ゼミⅠ	豊富町
内田1部ゼミⅠ・Ⅱ	恵庭市
内田2部ゼミⅠ・Ⅱ	函館市
大貝1部ゼミⅠ	十勝管内
大貝1部ゼミⅡ	山形県七戸町
大貝2部ゼミⅠ・Ⅱ	函館市
川村1部ゼミⅠ・Ⅱ	札幌市
佐藤信1部ゼミⅠ	江別市
佐藤信1部ゼミⅡ	札幌市
西村1部ゼミⅠ・Ⅱ	浦幌町
西村1部ゼミⅠ・Ⅱ	下川町
西村1部ゼミⅠ・Ⅱ	白老町
濱田1部ゼミⅠ・Ⅱ	洞爺湖町
西村・濱田2部合同ゼミⅠ・Ⅱ	沼田町
早尻1部ゼミⅡ	鹿児島県垂水市
平野1部ゼミⅠ	札幌市
平野1部ゼミⅡ	函館市
平野2部ゼミⅠ・Ⅱ	札幌市
藤田1部ゼミⅠ	秋田県北秋田市
藤田2部ゼミⅠ	沼田町
古林1部ゼミⅠ	札幌市(野幌)
古林1部ゼミⅡ	洞爺湖町
水野1部ゼミⅠ・Ⅱ	幌加内町
水野谷1部ゼミⅠ・Ⅱ	旭川市・豊浦町
宮入1部ゼミⅠ・Ⅱ	石狩市
宮入2部ゼミⅠ・Ⅱ	富良野市
山田1部ゼミⅠ	富良野市
山田1部ゼミⅡ	安平町
山田2部ゼミⅠ・Ⅱ	倶知安町



がっかりから感動へ、これがコロナ禍で1部山田ゼミⅡの地域研修がたどった一年でした。予定の沖縄訪問をコロナで取り止めにし、急遽安平町に変更、その研修がすばらしいものだったからです。

ゼミでは、デジタル技術を使った地域活性化をテーマに、リゾートとテクノロジーを掛け合わせた「リゾテック沖縄」の調査のため、沖縄を訪問先を選び、事前学習も積み上げていました。しかし、コロナの急拡大で断念、急遽変更したのが胆振の安平町です。

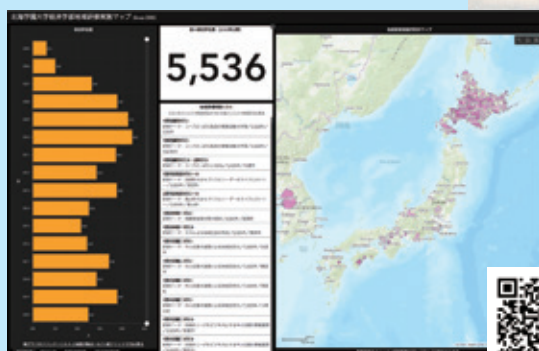
この町のデジタル化は、ゼミで毎年参加していたNoMapsで知りました。安平町の及川町長さんと職員の方の、胆振東部地震によって被災した安平町のピンチをチャンスに変えよう、という2019年のセッションです。

安平町への最初の訪問先は、はやきた子ども園です。保育士さん同士の連絡に一人に一台のiPad、iPod touchなどを活用し、20代の方から60代の方もそれに習熟、時間がとられる保護者との連絡業務や入退室などもデジタル化していました。残業時間も減ったとのことで、活き活きした保育士さんの現場を目の当たりにして、園長先生から聴いたすばらしい保育と運営の方針、恵まれた自然環境、「デジタルを使うのが目的ではなくて、より良い方法でデジタルを使うこと」がここでは実践され、「安平で安心子育て」を実感してきました。

次の安平町役場の訪問では、起業を促すイベント「ファンファーレ」、デジタル技術をふんだんに使った小中9年一貫の義務教育学校の構想、「お固い役所」とは異なった柔軟な情報発信、について解説を受け、ゼミ生はいずれの説明からも現場の活き活きさを実感していました。

遅れている、と言われる日本のデジタル化の理由の一つはトップの姿勢だ、と言われていました。ゼミ生は、この解決の方向を現場で体感し、意義があったと考えたようです。そして急な受け入れに応じていただいた安平町役場の方に感謝です。[山田]

● 経済学部webサイトで、これまでの研修地や参加者数を、地図化して掲載しています。



<https://econ.hgu.jp/program/field-work.html>



山田ゼミ：写真上、安平町でOBの職員からの説明。写真右、はやきた子ども園の職員室で説明を聞く。



豊富町は、酪農とサロベツ湿原を特徴とした雄大な自然の町である。また、豊富温泉は世界でも珍しく油分を含んでおり、皮膚病の湯治場としても知られている。一方で、過疎地に共通した問題にも直面しており、教育、地域交通、買い物難民、移住定住促進への取り組みが大きな課題である。

当ゼミ（資源・エネルギー経済論）の地域研修は、9月14～16日の2泊3日で豊富町をフィールドに実施する予定であった。6月に本学と豊富町との間で包括協定を締結した縁で、視察の受入が決まった。しかし、東京五輪前にコロナ感染が急拡大したため、現地での視察が中止となった。その代替措置として、9月15日にZoomを用いて、町長の講話と役場担当者による学生からの質問への説明が行われた。現地を訪問できなかったため、学生たちには報告のとりまとめで相当苦労を強いしたが、報告書の作成と12月18日の学部地域研修報告会でプレゼンを行うことができた。また、12月11日には、Zoomを用いて他大学との合同ゼミ（一橋大、立命館大、龍谷大）でも報告を行った。

Zoomやインターネットという情報技術が存在したことで、‘仮想’の地域研修は行えたのかもしれない。しかしながら、現地を見ないで調査報告をまとめることは、たとえ卓越した想像力をもってしても厳しい。学生たちは調査の難しさを感じたかもしれないが、楽しさを味わうことができなかったと思う。不可抗力とはいえ、残念と言う以外ない。

余談であるが、豊富町での現地視察の中止が決まった後、札幌近郊で現地視察できないかと考え、9月中旬に日帰りでニセコ町の視察を行うことが決まった。だが、こちらもコロナ感染の拡大で中止となった。10月以降に再度調整することも考えたが、授業期間中での実施が難しく断念した。来年度は、学生たちと一緒に‘本物’の現地視察を楽しみたいと切に願っている。[上園]



上園ゼミ：写真上、オンラインによる豊富町長の講話を聞く。写真下はサロベツ原野



野幌森林公園（背景写真も）



瓢箪から駒

古林ゼミでは地域研修Ⅰ（2年生）は道内、地域研修Ⅱ（3年生）では、同じテーマで道内と道外を比較する観点から、道外での研修をおこなってきた。

それが、この2年間、新型コロナウイルス感染拡大のおかげで、道外や遠隔地での実施に支障が生じ、急速大幅に予定を変更せざるを得なくなってしまった。

当初今年度の地域研修Ⅰは、国立公園満喫プロジェクトの対象となっている阿寒摩周国立公園で、自然環境の保護・保全と利用をテーマに実施する予定だったのが、研修地を札幌市近郊の北海道立自然公園である野幌森林公園を研修地とすることになった。

大学から30分足らずで行くことのできる場所であることから、日帰りで研修となり、物足りない部分もなくはなかったが、まさに「灯台下暗し」を感じる研修となった。『禍転じて福となす』とまでは言わないが、もし、コロナ騒動がなければ研修の対象地となることはなかったであろう。

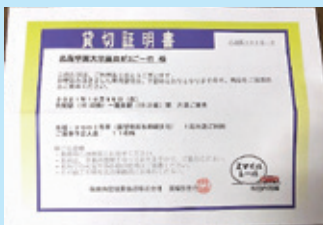
野幌森林公園は、大都市近郊の自然公園としては世界屈指の広さを有し、さらに開拓が進んだ明治期から保護がなされてきた歴史をもつ。

野幌森林公園内の施設である『開拓の村』や『北海道博物館』に行ったことのある学生は多いが、その周辺に広がる広大な自然公園に足を踏み入れた経験のある者はほぼ皆無だろう。博物館でのレクチャーや公園内の散策を通じ、自然環境の利用と保護・保全の難しさを改めて知る研修となった。私自身、コロナ禍でなければこうした問題をリアルに感じることはできなかったろう。

瓢箪から駒、人間到處青山あり。どんな状況下でも得るものは大いにあるものだ。[古林]



藤田ゼミ：写真上は帰路の貸切列車。写真下は貸切証明書と縄文遺跡の土偶たち



1部の藤田ゼミでは、秋田内陸縦貫鉄道沿線（秋田県北秋田市・仙北市）において、沿線観光資源の調査及び鉄道事業者の観光・地域活性化への取り組みを学ぶことを目的とした地域研修を実施した。当初は9月1日に実施する予定であったが、緊急事態宣言の発令に伴い延期が余儀なくされ、10月15日に実施する運びとなった。コロナ禍でオンラインによるコミュニケーションの機会も増えた一方、対面だからこそ分かる空気感というものがある。特に観光は現地に行き、その地ならではの体験をし、人々とふれあうからこそ成立するものだからこそ、観光に関わるテーマで行う地域研修は今後のウィズコロナ社会を見据えても非常に重要なものと言える。また、コロナ禍での移動の自粛は、旅客輸送を担う交通事業者にとって大きなダメージとなった。こうした中でも旅客需要を確保するために、交通事業者も様々な取り組みを行っているのである。今回訪問した秋田内陸縦貫鉄道では、地域研修を実施した2021年10月時点で、沿線自治体の秋田県・北秋田市・仙北市による助成金を用いてフリー切符や貸切列車の割引が行われていた。学生たちに地方鉄道事業者の取り組みを実際に知ってほしいという目的と、コロナ禍であるが故に密になることを極力避けるという目的から、角館から鷹巣への帰路を、観光列車用として2021年2月に改造されたばかりの車両を用いた貸切列車で移動した（定期列車に連結した形をとったので厳密には貸切車両というべきか）。地域研修で貸切列車を使ったゼミは恐らく今回が初めてだと思うが、学生たちは貴重な経験ができ、楽しめたのではないだろうか。いや、一番楽しんだのはゼミ生ではなく私自身かもしれない。[藤田]

[令和3年12月18日] 1部・2部ゼミナール

地域研修報告会が開催される

12月18日（土）、「地域研修報告会」が開催されました。7会場にわかれ、32グループが研修成果の報告と質疑応答を行いました。

地域研修は、2年次以降の学生が履修する経済学部講義です。ゼミナール単位もしくは複数のゼミで現地研修を実施し、現実の生きた経済・社会を学ぶことを狙いとしています。年度明けに実施するガイダンス以降、学生は、年末まで事前学習・現地研修・事後学習に取り組めます。報告会はこの成果を披露する重要な機会となっています。

2021年度は緊急事態宣言が発令されるなど、コロナ禍が続いていたため研修の実施にあたって様々な困難がありました。そのような中、各ゼミは研修地や内容を変更するなどの工夫を重ねて、報告会に至りました。なお、一部のゼミは、報告会後の現地研修を予定しており、この場合には「中間報告」の位置づけとしました。

報告会では、各グループが、研修テーマやその背景の説明はもちろんのこと、テーマに対して、どのようなことが研修から明らかになったのか、ということ、現地研修や事前・事後学習の成果を活用して発表していました。今年の研修テーマは、森林を活用した地域づくり、宮城県酒蔵の特徴、買い物難民問題、協同組合組織のSDGsの取り組み、観光資源としての鉄道の活用、等、北海道や日本が抱える重要な地域課題に真摯に向き合ったものが多くみられました。また、報告の様子からは、研修からどのような成果が得られたのか、メンバー間で何度も議論を重ねてきたことが良くわかりました。

様々な制約下で実施された今年の地域研修でしたが、今回の貴重な経験は、今後の学修や社会生活にとって大きな糧となるものと思われれます。[浅妻]



研究室の窓から フランス語文学が内包する 多様な世界

一條 由紀 経済学部教授
いちじょう ゆき

〔専門はフランス文学〕

札幌市出身。博士（文学）早稲田大学。早稲田大学第二文学部助手、早稲田大学・明治大学・大東文化大学非常勤講師を経て2014年4月本学に赴任。

●主な研究業績に「イン・チェンにおける“attachement”と“détachement”の運動 —『傷』と『山々の緩慢さ』について」『ケベック研究』第11号、2019年
「イン・チェンにおける海のイメージの変容」『学園論集』第183号、2020年

カナダにおける仏語と文学

フランス語は世界のさまざまな国・地域で話されています。もともとの私の専門はフランス文学ということになりますが、最近主に研究しているのはイン・チェンという中国系カナダ人作家です。カナダは英仏二言語が公用語ですが、州ごとにも公用語が定められており、チェンがカナダで最初に住んだケベック州はフランス語のみを公用語としています。カナダのフランス語話者の約9割はケベック州に集中していますが、それは他州では圧倒的に英語話者が多いということを意味しています。

フランスはかつて北米に広大な植民地を持っていましたが、18世紀にイギリスとの植民地戦争に敗れ、領有権を失いました。ケベックに残ったフランス人入植者たちはフランス本国から切り離され、その後長い間、イギリス系住民が支配的な土地で経済的社会的に劣位に置かれることになります。しかし、1960年代に「静かな革命」と呼ばれる社会改革が行われると、ケベックは急速に近代化し、カトリック教会を拠り所とする保守的な価値観からも解放されます。ケベック人は「わが家の主人」となることを求め、1977年にはフランス語を州の唯一の公用語と定めます。また、カナダからの分離独立運動が盛り上がりますが、1980年の住民投票で否決されます（1995年の住民投票でも主権確立派は僅差で敗北します）。一方、連邦レベルでは1971年に多文化主義政策が開始されましたが、この政策は係系カナダ人を建国の二民族ではなく、ほかの

さまざまなマイノリティと同様に扱うものではないかと、ケベックでは批判的に受けとめられていました。1967年の移民法改正以降ケベックでも移民が増加していましたが、ケベック社会は多文化状況が進むなかで自文化を守りながら、多様な出自の移民とどのような関係を結ぶのかという問題に向き合うことになります。特に、従来から他州の大都市よりも英仏バイリンガル率が高かったモントリオールでは、多様な移民の出自の言語も話される三極構造が進みます。ケベックはカナダの多文化主義とは異なる間文化主義を選択し、フランス系の文化を核とし、多様性を束ねるものとしてフランス語を重視しながら、異文化間の交流を促し、ともに発展していこうとします。このような歴史を背景に、1980年代以降のケベック文学ではフランス語で創作を行う移民作家が増加し、彼らの作品は「移動文学」と呼ばれ、新たな潮流として注目されました。「移動文学」はケベックの文化的雑種性を反映するポストモダンの文学です。

流浪、複数性を生きること

1961年に上海で生まれたチェンは、1989年にモントリオールの大学に留学し、そのままカナダに移住することになります（現在はバンクーバーを拠点としています）。修士論文で文学研究と創作を行い、その時の小説に手を入れた『水の記憶』を1992年に処女作として出版して以来、多数の小説に加えて詩やエッセーも発表しています。チェンの作品はさまざまな「流浪」を主題にしています。移住・移民といった地理的な移動をとまなう流浪だけでなく、「今ここ」に居心地の悪さを感じる内的流浪も描かれます。複数の文化や言語を生きることのも一種の流浪です。チェンは「移動文学」の模範的作家と考えられましたが、チェン自身はそうにカテゴライズされることをあまり快く思っておらず、自分は単に作家であると述べています。近年のチェンは実在の人物を題材にした小説を書いています。それはいわゆる伝記とは異なり、主

人公の名が小説内で明示されることはなく、物語の舞台がいつどこなのかもぼかされています。チェンは、実在の人物を参照しつつも、彼（女）をある流浪の状況を生きたひとつのケースとして扱っているように思われます。2020年発表の『射光』では、女性科学者イレース・ジョリオ＝キュリーを主人公のモデルとしており、ポーランドからフランスへ渡った母マリー・キュリーと、移民二世であったイレースの物語を通して、親子二代にわたる流浪を語っています。それは、チェンの関心が、今や自らの流浪だけでなく（あるいはそれ以上に）自分の子どもたちの流浪にも向けられていることと合致していると考えられます。

例えば、私がチェンの前に研究していたロートレアモンも流浪を生きた詩人でした。彼はフランスからウルグアイへ渡った両親のもとに生まれた移民二世であり、両親とは逆にウルグアイからフランスへ渡り、フランス語で詩を書いたのです。幼少年期を南米で過ごし、フランス語とスペイン語のバイリンガルであった彼もまた、複数の文化と言語を生きたのです。その作品『マルドロールの歌』や『ポエジー』は、19世紀フランス文学にあって異彩を放っています。

このように、フランス（語）文学が内包する世界は多様です。チェンとロートレアモンに共通するのは、複数性を生きることによるアイデンティティの変容への感受性ですが、今後は両者を比較する論考にも取り組んでみたいと思います。



▲セント・ローレンス川。北米フランス植民地はセント・ローレンス川沿いに入植が始まった



▲モントリオール旧市街の北に位置するチャイナタウン

[令和3年12月16日ほか]

基礎ゼミプレゼン大会が開催される

基礎ゼミ合同プレゼン大会が、12月から1月にかけて曜日ごとに開催されました。各基礎ゼミ内で3～4グループに分かれ、おおよそ1グループのプレゼンテーション10分、質疑応答とコメント10分、合計20分の報告が行われました。報告テーマは、レジ袋削減効果、大学生と虫歯について、オンライン試験における不正対策について、労働問題、人口減少問題、など様々となりました。4月からの基礎ゼミでは、レジュメの作成方法や文献検索、文献解読法等を修得しましたが、修得したスキルをフル活用して行われたプレゼンテーションに対し、鋭い質問や指摘がなされるなど、質疑応答も活発に行われました。プレゼンテーションを準備するにあたり、教室以外のオンライン上での取り組みも見られ、2年次以降の専門ゼミの準備となったかと思います。この経験を活かし、専門ゼミでより深く建設的な議論が行えるようになってほしいと願っています。

[野口]



[令和3年11月26日]

財政学講演会

昨年度に引き続き、財務省主税局総務課課長補佐で現役 K1 ファイターの松本篤人氏を講師にお迎えし、オンラインで講演会を開催しました。この時期は、来年度の税制改正に関する議論が行われる「税の季節」にあたります。この時期に、財務省でご活躍されている松本氏から直接、税に関するお話を聞くことが出来るタイムリーな企画となりました。ご講演では、税収、公債発行額や政府債務残高の推移等からわが国財政を定量的に把握した後、主要国税の基本的な仕組みと課題、国際課税に関する最近の動きを説明されました。デジタル課税については、講演会開催1か月前に多国間で最終合意に至ったばかりのトピックスで、受講生の関心が特に高かったようです。松本氏をはじめ、講演会開催にご尽力いただきました皆様に、改めて感謝申し上げます。[野口]



From a Distance 17

「鬼籍に入られた先生がた」

● 水野 邦彦 [経済学部教授]

大学3年のころ、目黒区八雲の東京都立大学でとうじ私が取り組んでいた古典を詳説する授業がおこなわれると聞いた。それは大学院の演習であったが、吉澤傳三郎先生は他大学の私がモグリで聴講することを許された。吉澤先生からは、この著作では〈ästhetisch〉が〈logisch〉と対置されるので「美的」でなく「感性的」と訳すべきことをはじめ、緻密な読解の手解きを受けた。雑談のなかで聞いた「学会は人に会いにゆくところだ」という言葉にも、いま私は納得している。

20代前半に手にした本に竹内芳郎『サルトル哲学序説』がある。この本を「どんなに夢中になって読んだことだろう」（海老坂武『戦後』が若かった頃）岩波書店という感慨に私は満腔の賛意を覚える。全頁の随所に線を引いて二度精読したのは、この本が初めてであった。20代のうちに私

は筆名論文をふくめ竹内先生の全著作を読んだ。のちに先生とは数年の間つきあいができ、狛江のお宅に伺ったこともある。

34歳のときにソウルで知己を得た中村福治先生は、韓国について私が若干の知見を形成するさいの師匠であった。韓国でも日本でも中村先生の人的つながりは驚異的で、おかげで私も知り合いがふえた。先生は2004年に逝去なさったが、京都府乙訓のご自宅での葬儀には徐勝(ソ スン)さん文京洙(ムン ギョンス)さんら多数の人士が集まった。

昨年、姜徳相(カンドクサン)先生が世を去られた。28年ほど前に先生のゼミ韓国研修旅行に同行させていただき、観光地とは異なる韓国を見聞する貴重な機会を得た。その折りに伺った数々のお話には先生の信念と情熱とがあふれていた。先生の講義は「魂の講義」だ、とは某学生の弁であ

る。その後、先生はご著書を何冊も恵与くださった。

今年1月1日には池明観(チ ミョングワン)先生が他界された。先生が本学で講演くださったことは記憶されてよい。講演後に学長応接室で伺った数々のお話も忘れがたい。

週れば10代のとき私は萬葉集学者の中西進先生に1年ほど教えを受け、日本文化の源流を垣間見たが、先生が92歳でご健在なので、ここで筆を擱きたい。



▲ 写真は1994年8月31日韓国・北漢山での中村福治先生



頑張ってよかった。
そう思える日がいつか必ず来るはず

杉村 紗依子さん
すぎむら さえこ



新型コロナウイルス感染症が拡大し始めた2020年春に本学を卒業した杉村紗依子さん。
未曾有のコロナ禍で社会人としての一步を踏み出しました。

コロナ禍で卒業式が中止に

北海道で初めて新型コロナウイルスの感染者が確認されたのは2020年1月。翌月に道が緊急事態宣言を決定し、全道の小中高に休校を要請したことから、大学の卒業式も急遽、中止となった。

「卒業証書は郵送で受け取りました。部活の後輩からも寄せ書きや記念品が届いてうれしかったのですが、みんなと会えなかったのはやはり悲しかったですね」

2年前の春をこう振り返るのは、杉村紗依子さん。大学時代は「新しいことに挑戦してみたい」と弓道部に入り、3年生のときには体育会本部の第64代幹事長として活躍した経歴を持つ。

「女子が幹事長というので驚かれたこともありましたが、先輩方を選んでいただいたので、精一杯頑張りたいと思っていました」

と思います」

充実した4年間を送っただけに、締めくくりの卒業式が中止になってしまったのは、さぞ残念だったことだろう。

自分を見つめ直した就職活動

杉村さんはいま、札幌市西区に本社のある株式会社須田製版の営業部で働いている。

「私は弓道部と体育会本部の活動に夢中で、就活はみんなより出遅れたんです。志望の業界も絞り切れていなかったんで、合同説明会には積極的に参加するようにしました」

現在勤める須田製版を知ったのも学内で開催された合同説明会だった。

「社名は印刷会社のイメージが強いですが、ウェブサイトや動画の制作、ドローン撮影、電子書籍など、幅広いモノづくりを手掛けていると知りました。私は絵を描くのが好きで高校時代は美術部だったので、専門性を高めながらさまざまな経験ができるのでは、と感じたのが志望のきっかけです」

もう一つ大きな理由は、北海道に根ざした企業だったこと。もともと大学で「地域経済学科」を専攻したのは、生まれ育った地域に貢献したいという地元愛が強かったから。就活の当初は金融や運輸などの業界も視野に入れていたが、自分の興味のあることは「地域に根ざしたモノづくり」だと気づき、同社への就職を選択した。

しかし入社後も新型コロナウイルスの猛威は収まらず、外出自粛やイベントの開催制限が要請されるなか、新入社員の杉村さんにも在宅勤務の期間があったという。

「会社からテーマを与えられて、自宅でリサーチをして提案をまとめ、同期と2人でプレゼンする課題が出たのですが、このときは大学での学びが役立ちました。地域研修報告会でパワーポイントの資料づくりから、プレゼンの組み立て、発表の仕方まで一通り経験していたので、戸惑うことなく取り組めたと思います」

地域に根ざし、地域のために働く

大学では早尻正宏先生のゼミに所属し、山村地域の産業再建や地域コミュニティの再生について研究した杉村さん。林業の盛んな道北の中川町や、東日本大震災の被災地である福島県田村市での現地調査も経験し、地元の方々と交流する機会も得た。少子高齢化や人口減少など、都市部から離れた地域の課題を肌で感じる事ができたと言う。

「今はまだ担当するお客様からの依頼をこなすだけで精一杯ですが、当社は全道に支社や営業所があるので、将来は人口が減少する市町村に人を呼び込むための魅力発信のお手伝いがしたい」と杉村さん。ゼミで学んだ開発政策論を踏まえ、地域のために力を尽くす機会が来るのを楽しみにしている。

最後に後輩へのメッセージを願うと「自分はこれを頑張ったと自信を持って言えるような大学生活にできればいいですね。苦労はあっても頑張っただけでよかったと思える日がいつか必ず来るはずだと思います」と答えうえて、さらに、こう付け足した。

「といっても、今はコロナ禍で地域研修やクラブ活動が思ったようにできず、私たちの在学時とは環境が違いますよね。もしかしたら身近に相談ができる人がいなくて苦しんでいる学生もいるんじゃないでしょうか。大学のサポートが大事だと思います」

パンデミックの収束はまだ見通せないが、この困難を乗り越えた先に希望がある。そう信じて前に進みたい。



profile
1998年 札幌市出身
2016年 北海学園札幌高校卒業
2016年 本学経済学部地域経済学科入学
2020年 卒業後、(株)須田製版に入社、営業部で活躍中



▲東北学院大学との総合定期戦では、体育会本部の幹事長として選手宣誓

体育会本部とは、体育会系の部活動35団体を取りまとめ、東北学院大学との総合定期戦を運営する組織。杉村さんが幹事長を務めた年は、仙台へ遠征して、各部活のメンバーが熱戦を繰り広げた。

「団体に所属し、先輩・同期・後輩たちと関わりながら同じ目標に向かって努力する、貴重な体験ができました。学内・学外問わずさまざまな人との交流を通して自分では思いつかない考え方を知ることができ、互いに高め合える環境だった

【令和3・4年11月22日、12月3、7日、1月13日】1部・2部基礎ゼミナール

フロンティア講座が開催される

フロンティア講座を基礎ゼミの時間にオンラインと対面で実施しました。社会で活躍されている卒業生による講演です。2021年度は、伊藤好一氏、腰越雅敬氏にご登壇いただきました。

伊藤氏は現在短期大学で研究・教育にたずさわられています。「活動と研究の両立からみえたもの」というテーマで、研究者になるまでの道のりを楽しく語ってくれました。転機となった、ゼミの活動・学びと、休学中の途上国への旅などのお話は魅力にあふれ、体験にもとづくアドバイスもいただき、大変有意義な授業となりました。[神山]

腰越氏は「遠回りだった近道 ～42歳で教員を目指した人生～」というタイトルでご自身の経験をもとに「いかに失敗を経験値とするか」を語られました。腰越氏は現在苫小牧の高校で教壇に立つたわらアイスホッケーの指導者・解説者としても活躍されています。しかし今に至る道のりは「失敗の連続でした」とのこと。ホッケーの才能を買われ「天狗になった」若き日のエピソードが語られ、「その思い上がりに起因する失敗こそが貴重な財産になっています」という言葉に説得力がありました。[上村]



対面で行われた講演時の伊藤好一さん(写真左)と腰越雅敬さん

【令和3年11月27日】

第6回食糧支援開催

2021年11月27日に第6回食糧支援を生協食堂で開催しました。約600人が来場し、コロナ禍で困窮している学生を支援することが出来ました。以下に、このプロジェクトを主催した学生自治会の桑折大哉さん(地域経済学科3年)の“思い”を紹介します。なお、第7回食糧支援が、2022年2月20日に開催されました。

食糧支援に参加して

食糧支援の第1・2回目は“受け取る側”として参加しましたが、参加するうちに気になってきて、二部自治会に入り第3回以降は“スタッフ”として参加させてもらっています。

私は、家庭事情により高卒で就職して貯金をためて、退職後に入学して学費を支払ってきたので、「自分よりも厳しい状況の学生はあまりいない」という先入観がありました。

しかし、活動を通じて「支援を必要とする人も実はたくさんいて、普段は表に出さないだけなんだ」ということに気がきました。また、食糧支援以外にも困窮者や成績優秀者への学費・研修費の一部免除といった支援を強く望む学生も多いのではないかと思います。

食糧支援の際に自治会が行う仕事を紹介します。前日準備は、ひたすら重い荷物を降ろして運びます。当日は、前回までの反省を踏まえ、配置決めから始まり、配付の時間が始まってからは受付や各物資の説明などを分担して行い、最後は片付けをして終了です。

経済学部生として印象に残ったことは、地域との連携です。地域研修先の沼田町から食品が届いたり、農協オリジナルで販売しているお米が並ぶ光景を見て、学生が就活や地域づくりの勉強をする上で、提供してくれた地域や団体に関心を持つキッカケになっていくと思いました。二部自治会執行部 桑折 大哉(地域経済学科3年)



【令和3年12月18日】1部ゼミナールⅢ

卒業研究中間発表会を開催

ゼミナールⅠ・Ⅱや外国書講読Ⅰ・Ⅱなどそれまでの専門的な学修の集大成として58名の学生が卒業研究に取り組んでいます。1月末の卒業研究提出に向け、12月18日に卒業研究中間報告会が開催され、58名、卒業研究54本のエントリーがなされました。

中間報告会では、卒業研究テーマの意義、背景、現段階で予想される結論などについて、他のゼミ生や指導教員以外の教員の前で報告を行います。学生にとっては「自分の設定したテーマの重要性が理解してもらえるか」、「着眼点のユニークさが伝わるのか」など、ドキドキ(ストレス?)を感じながらの報告だったのではないのでしょうか。ですがオリジナルなものを作成し、それに対しコメントをもらえる、共感してもらえるという機会は、とても貴重な体験となったと思います。もちろん学生にとって貴重な経験というだけではなく、面白いテーマや発想が含まれていました。

最終的に卒業研究として提出された論文の要旨は、卒業研究論文要旨集としてまとめられます。過年度のものを含め学部HPでも読むことができます。卒業研究のテーマ設定に悩んでいる3年生にとっては、一番身近なテーマ設定の参考資料となるでしょう。具体的に何を勉強したらいいのかわからない1、2年生にとっては、自分が知りたいことを研究・調査するためにはどのような知識が必要になるのかを知ることができるでしょう。ぜひ多くの学生に目を通してもらえたらと思います。[逸見]



各会場とも論文作成の仕上げに向けた、活発な議論が行われました

【令和4年2、3月】

2022年就職活動が本格化

2020年、2021年と、観光業界や交通業界は新型コロナウイルスの度重なる感染拡大により大打撃を受けてきました。他方で、巣ごもり需要やインターネット利用が拡大したことで、食料品小売業界、通販業界、IT関連業界などのなかには好調な企業も見受けられました。希望する業界が好・不況のどちらなのか、皆さんはよく見ておく必要があります。

また世界経済は経済成長に向かっているのですが、我が国の経済成長は鈍いです。しかしそれでも、どの業界も生産労働人口の高齢化が進み、各企業とも新卒者の採用意欲はそんなに落ちこんでいないようです。2021年に本学にきた求人情報は2020年よりも増えました。今年も増えると思います。拘る業界・業態がないのならば、就職活動の環境は悪くはないかと思います。

2020年、2021年の経験を通して就職活動における心配事があります。それは就職活動が「孤独な闘い」になって不安を抱えている方が多くなっていることです。大学というコミュニケーションの場に来る機会が減り、就職活動における自分のポジションがわからなくなっているためです。そうならないためにも、ゼミ、部活、サークルなど大学内でつくったいろんなネットワークを使って就職活動の



情報を共有してもらえればと思います。また本学には、キャリア支援センターでグループディスカッションなどの就活セミナーを提供しています。是非、こうした仕組も活用してください! [濱田]

